

編集と発行

### 金木町企画室

青森県北津軽郡金木町  
 大字金木字朝日山 323  
 電話 ☎ 2111 内線 240



元旦の顔  
 大佐賀界輝ちゃん  
 一月一日満一歳になりました。

## 金木町の木・花・鳥

昭和60年8月1日制定

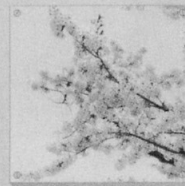
### ひば

ひばは別名杵杵とも呼ばれ、強い生命力をもつて自然増殖し、長い年月を風雪に耐えて成長を続け、木を美しく彫刻に用い、海外の洋材や家具などから利用される。ひばを植えた環境がやわらかく、二酸化炭素吸収能力が強く、大空のふろこを金木町をより住みやすくするため、この樹種を定めます。



### ひばり

ひばり、雛鳥や雛で、生ますひばりから大羽になるまでひばりは、もしたのひばりにおそろい姿をみせてくれ、歌の囀るひばりは、金木町をより住みやすくするために、この鳥を金木町に定めます。



### さくら

桜は美の国に制定された日本を代表する花であるが、春は月が空に輝く夕陽に輝き、花を咲かせる桜の姿は、桜の国の町を彩り、訪れる人々の心を和ませる上にも、町民から親しまれ、大切に育てられている花である。

## 金木町民憲章

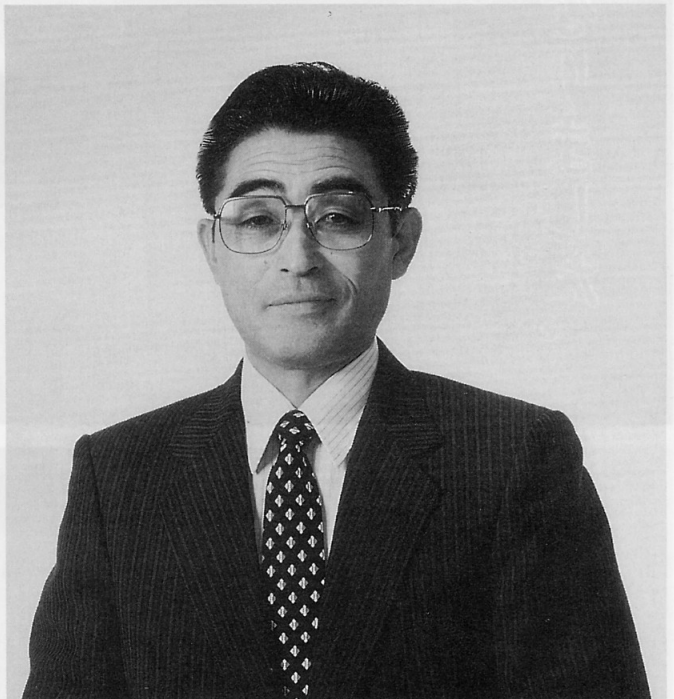
昭和六十年八月一日制定

- 一、ふるさとの自然を大切に、美しい町をつくりましょう。
- 一、心とからだを鍛え、さわやかな町をつくりましょう。
- 一、伝統ある文化を高め、明るい町をつくりましょう。
- 一、きまわりを守り助け合い、幸せな町をつくりましょう。
- 一、働くことに喜びと誇りを持ち、つるおのいのある町をつくりましょう。

# して ございます



## 平成三年の 年頭にあって



金木町長  
田中勇治

平成三年の年頭にあたり、町民の皆様にご挨拶申し上げます。

昨年十月三十一日に就任以来、町経済の停滞を痛感し、より一層の活性化を図っていかねければならぬと思ひながらこの二カ月を過ごしてきました。

農業においては主要作物である米が米価引き下げばかりではなく、他用途米を含むと約三割の減反、国からの補助金のカットなどのため、今や専業農家として

生活できない状況に迫られていきます。若者の農家離れに一層の拍車をかけるように西暦二千年には四人一人が老人となる。このため、町の農業を維持して

いくためには農作業の広範な委託や、減反分の収益を補うためにより高収益性があり、且つ作業的に軽い転作物の導入を早急に図っていかねければならないと考えている。

また、町商工業の発展にはまず町の外に流れている

買い物客を呼び戻し、物を買ってもらわなくてはならない。それには役場から模範を示すように特殊な製品以外はなるべく町の商工業者を通じて物資の供給を図ることとし、商工会とも連絡を密にして、いろいろな

祭りに対しても財政的な援助も含めて金木町に人を呼んで物を買ってもらおうという商店街作りを進めていきたいと考えています。観光問題については、県

立芦野公園周辺の再開発整

備等と同時に団体客が泊まれる宿泊施設の誘致などに積極的に対処したい。その他若者が安心して働ける町を造るため、企業誘致など積極的な政策を進めていく覚悟です。

そのためには財政を充実させ、積極財政という考えのもとに町政を進めていきます。

最後に町民の皆様が今年一年、昨年にも比して良い年であることを願います。



# 新年明けま おめでとう

## 町議会を代表して

議長 竹内 武六



穫間際のリんごが大量に落下し、折角、丹精込めた果実が半値にもならない価格となったという事は、誠に残念なことであり、被害を受けられた農家各位に対して心からお見舞い申し上げますとともに、本年こそ豊作をと願わずにいられない気持ちであります。

平成三年の年頭にあたり、町議会を代表して新年のごあいさつを申し上げます。  
私は、一昨年十二月第百三十回定例町議会におきまして図らずも議長の要職につきましたが、おかげさまでもちまして大過なく新年を迎えることができました。これもひとえに町民各位のご支援とご協力の賜であることから感謝の意を表する次第であります。  
さて、昨年は、例年訪れる台風もなく一安心と思っていた矢先、十一月四日夕刻からの強風により広範囲に亘り被害を受け、特に収

に地域住民の代表として住民の要望を汲み取り少しでも豊かな住みよい町づくりに努めなければならないとともに議決機関たる我々町議会といたしましては、本年もまた終始公正に町民の信託に応え、町政の諸問題を慎重に審議し、町民各位のご期待に添うよう努力する決意であります。  
どうか町政に対する皆さんのより一層のご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。新年のごあいさつといたします。

謹んで初春の  
お慶びを申し上げます

副議長 金木町議会

伊丸岡 勇 小野 祐 蔵	福山 初 枝 古川 哲 雄	白川 豊 則 加藤 卓 爾	中村 政 徳 其 田 豊 一	對馬 兼 正 吉 田 米 逸	白川 徳 政 吉 崎 正 光	鳴海 義 男 伊 藤 清 慈	小林 長 一 沢 田 茂	小田 桐 喜 吉 野 宮 雄 造
--------------	---------------	---------------	----------------	----------------	----------------	----------------	--------------	------------------

# 年男・年女



大橋千春  
昭和54年10月23日生



角田さやか  
昭和54年12月28日生



菊地咲代  
昭和54年4月25日生



下山貴子  
昭和54年7月27日生



須崎郁美  
昭和54年4月16日生



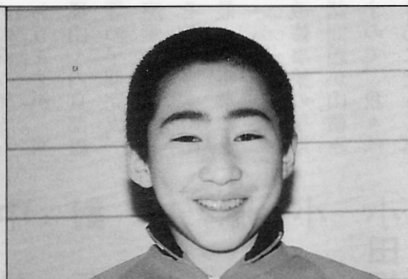
其田幸花  
昭和54年3月15日生



新岡史英  
昭和54年7月5日生



野上正之  
昭和54年3月31日生



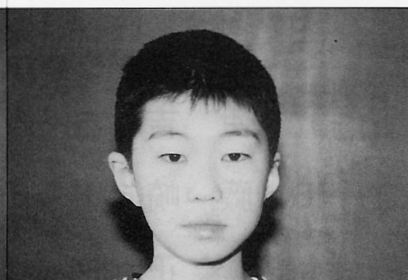
原田貴仁  
昭和54年2月27日生



棟方広樹  
昭和54年8月8日生



山中梢子  
昭和54年7月2日生



米塚貴博  
昭和54年9月5日生

# 未来をせおう



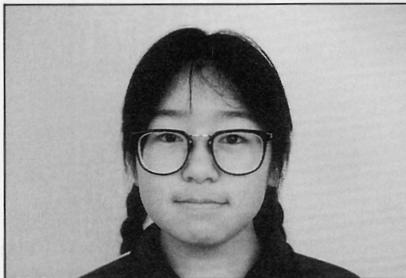
相内 嘉栄  
昭和54年 5月11日生



伊藤 麻生  
昭和54年 6月6日生



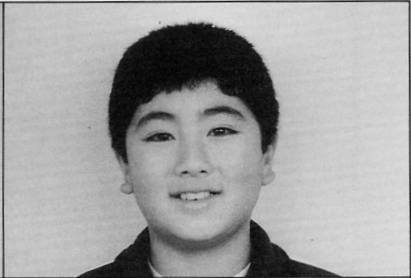
内海 孝  
昭和54年 2月24日生



工藤 綾子  
昭和54年 2月7日生



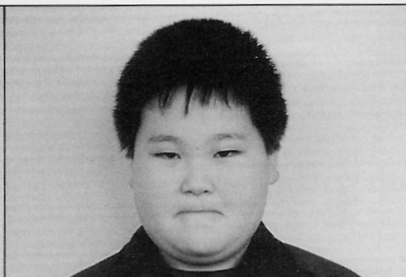
今良 介  
昭和54年 9月12日生



佐井川 伯  
昭和54年 2月8日生



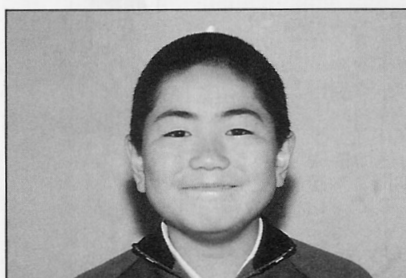
竹谷 大介  
昭和54年 5月5日生



津島 宗治  
昭和54年 6月26日生



中谷 亜有美  
昭和54年12月5日生



藤元 新  
昭和54年 8月23日生



前田 祥子  
昭和54年 9月21日生



三鴻 洋生  
昭和54年 3月6日生

# 平成

三年は未年です。羊は「おとなしい」「柔順」「群れになる」などのイメージがありますが、何よりもわたしたちが実感できるのは、ウールのセーターや皮製品の肌ざわりと温かさです。

羊は紀元前六千ごろ、家畜化されたといわれています。馬が家畜化されたのが、紀元前三千四千年ごろです。羊と人間の付き合いは、かなり長いことになりました。

# 日本

には、羊の諺があまり多くありません。

すぐには思いつくところでは、「羊の皮を着た狼」「羊頭狗肉」くらいのもです。曲がりくねった山道を「羊腸」と表現しますが、これはちよつと古臭い感じがしますね。では、なぜ羊に関する諺が少ないのでしょうか。西暦五九

## 今年 は 未 年

九年、推古天皇の時代に、百濟から二頭の羊が贈られたと日本書紀に記されています。しかし、羊は乾燥した風土が好きなので、日本の気候に合



ゆたかに  
羊

わなかつたのでしよう。あまり繁殖しなかつたようです。そのため、欧米のように諺が多くないのだろうといわれています。

# 明治

の初期、政府は綿羊の飼育振興を試みましたが失敗。その後、軍服などの製造のために、羊の飼育が奨励されました。また、戦後は農家の副業として、多いときは百万頭も飼育されてい

ました。しかし、現在の飼育頭数は、北海道や東北などを中心に、三方七百頭くらいに過ぎません。最近では、全国各地で観光牧場などの整備が進み、子供たちが羊を見る機会が増えました。

羊毛は、天然繊維の人気上昇で、日本での需要が増えています。外国産が中心で、オーストラリアやニュージーランドなどから輸入しています。

さて、「一年の計は元日にあり」といいます。今年の目標を決め、「迷える羊」にならないよう、スタートを切りたいものです。

## データによる 日本人の暮らし

今年、成人式を迎える若者は、全国でおよそ百九十万人と推計されていますが、一方で、平成元年に生まれた赤やんは、約百二十五万人にとどまっています。

### 2000年後は人口1000人!?

出生率の急激な低下  
くといわれています。日本の人口は、まだしばらくは増え続けますが、平成十二年(二〇一〇年)前後にピークに達した後、しだいに減っていくものと推計されています。そして単純計算でいくと、二千年後、日本の人口はわずか千人になつてしまします。二千年もの間、低出生率が続くことはありえないでしょうが、日本が「少産少死」になつたのは確実です。

わが国の場合、平均二・一人程度の出生率が維持されないと、やがて人口の減少を招き高まっています。少ない子供、長い人生、多くなる高齢者が、幸せに暮らせる社会づくりの必要性が高まっています。

